

若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP)

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 21 年度派遣報告書

ータイ王国・タマサート大学, タイ語, (H20. 11. 23-H21. 03. 12)ー

平成 21 年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程 1 回生
竹口 美久

自身の研究テーマについて

近隣諸国からタイへの出稼ぎ労働者は、1988 年からの高度成長期に急増した。特に、隣接する、ビルマラオス及びカンボジアからの労働者が多く、タイ政府は 1992 年よりその時々閣議決定によって、彼ら进行管理しようと試みてきた。入国管理法上は不法入国・不法就労でありながら、内務省及び労働・社会福祉省の管轄下で外国人登録と労働許可証受給の手続きを経ることで正規の労働者となる、というのが直近の制度の骨子である。しかし、手続きの煩雑さや金銭的負担の為にその実効性は確保されておらず、昨今の不況や外国人労働者による犯罪増加も相まって、制度の抜本的改革が行われることとなった。新制度下では、3 国から新規流入する労働者は出身国政府のパスポート又は身分証なしにタイ政府のビザを受給出来ず、又、既にタイ国内で就労している者は、2010 年 2 月 28 日までに出身国政府による国籍証明という合法化手続きが必要だが、登録者数は伸び悩み、タイ政府が当該手続き期限の 2 年間延長を決めた、というのが現状である。

先行研究は、国境付近や工業地帯等、外国人労働者が多く居住・就労する地域で行われているものが多い。本研究は、首都バンコクにおいて個人或いは小規模集団で居住・就労する労働者に今回の制度改革が及ぼす影響、及び現代タイ社会における彼らの位置付けを明らかにすることで、タイ国の労働政策やバンコク都都市政策策定の一助になるものである。

研究言語の概要(～200 字)

広義のタイ語はラオス語やタイ系諸民族の使用する言語を含むが、狭義にはタイ王国の公用語を指す。タイ文字は 13 世紀スコータイ時代にクメール文字から作られたと言われており、44 の子音文字及び 32 の母音記号並びに 4 つの声調符号の組み合わせによって発音される音節文字である。基本的な語順は主語・動詞・目的語の SVO 型で、修飾語は後置修飾になるが、動詞の活用や時制についてはあまり厳し



[写真 1] ゲストハウスのスタッフ達。新年を祝うパーティの席で

くないという特徴をもつ。

語学研修の内容について

研修は、ITP 派遣生のために特別に編成されたマンツーマン形式の授業を通して行われた。担当して下さったのは国立タマサート大学教養学部タイ語学科の先生 6 名であり、1 日 3 時間×週 4 回の授業を 3 ヶ月間、計 40 回延べ 120 時間を受講した。

初月は外国人向けに編集されたテキストを用いて会話と読解を分けて学習した。テキストにはタイ文字・英語アルファベット表記・英訳が用意されていたが、当初から先生と相談の上、タイ文字部分を読むこととした。テキストを終了した 2 か月日以降は、タイ語で書かれた短い文章や新聞記事の読解を中心とし、会話については授業中の先生とのやり取りの中で更なる上達を目指した。読解に力点を置きつつ、課題となる文章を音読し、先生にチェックして頂くことでタイ語の声調に慣れるよう心がけた。この段階の途中から、自身の研究テーマに関する新聞記事や法律文等を授業で取り上げて頂き、日常会話であまり使わない語彙に多く触れる機会を持った。授業は、当初タイ語と英語を織り交ぜて行われたが、徐々にタイ語だけの授業へと移行していった。

こうした日常の授業の他、タイ語学科の学部生の研修旅行に同行させて頂いたり、調査候補地になり得る場所に連れて行って頂いたり、授業時間であるか否かに拘わらず、熱心且つきめ細やかな指導をして頂いた。



【写真 2】指導して頂いたタイ語学科の先生と。教養学部校舎にて

研修期間中に印象に残った体験や経験

タイ語学科の研修旅行に同行させて頂いたことは、普段先生とのマンツーマン授業を受けている私にとって、同年代の友人同士の会話に触れ、学ぶ大変良い機会であった。マイクロバスで大学から 2 時間ほど離れたペップリー県を訪れ、寺院やかつての宮殿を見学した他、金箔を用いた漆工芸も体験した。この研修旅行で知り合った友人達からは、その後もタイ語やタイ文化を、先生方とは違った視点から教わった。

大学外での多くの出会いも、充実した研修期間を過ごせた理由の 1 つである。到着直後からタイ語やタイでの生活について色々教えてくれたゲストハウスのスタッフ達、アパートの管理人や夜警、近所の人々。特に、夏の渡航時からお世話になっていたゲストハウスで過ごした時間は印象深い。ラオス人・ビルマ人スタッフや彼らの雇用主であるタイ人オーナーとのやりとりからは、自身の研究に関する示唆や刺激も多く得た。

目標の達成度や反省点について

①研究に必要な情報収集ツールとしてのタイ語（書き言葉としてのタイ語）、②日々の暮らしの中で使われているタイ語（話し言葉としてのタイ語）の習得、を目標とした。①については、授業の中で「読む」ことに重点を置き、語彙を増やす際に文字と結び付けて覚えるよう心がけた他、目に入る看板やチラシの文字を読み上げる訓練をした。読むこと自体に抵抗はなくなったが、まとまった文章を読むのは依然として容易ではない。②について、授業がマンツーマン形式だったため、積極的に教室外でタイ語を使う機会を設けたが、タイ人同士の会話となると、そのスピードについていけないこともしばしばであった。その他、バンコクで学ぶ利を生かして、タマサート大学や他大学の図書館で資料収集を行った。



[写真 3] タイ語学科の学部生にタイ語を習う

語彙力の向上並びに会話・読解の速度を上げることが今後の課題である。

末筆ながら、このような機会を与え、支えて下さった皆様に、心より御礼申し上げます。